

学校だより



市川市立平田小学校

～共に学ぶ 共に育つ 共に感動する そして共に幸せ～

いなほ
稲穂

学校教育目標

夢をもち、たくましく生きる
子どもの育成

No.18

令和4年11月15日

校長 蜂須賀 久幸

<https://ichikawa-school.ed.jp/hirata-sho>

植物だって褒められたい



以前、教育相談に関する校内研修を行った際、みんなが笑顔になる合言葉は、話を聴く側の「愛のソナタさ！」であると講師の方から話がありました。つまり、「あいづち」「いいですね」の「そうですね」「なるほど」「たしかに」「さすが！」の頭文字ですが、加えて「ありがとう」は魔法の言葉である

という指摘にうんうんとうなずく私たちでした。相手を認め、リスペクトし、寄り添ってくれていると感じられることは誰しも嬉しいものです。教室に掲示している学級もあります。

さて、IKEAがいじめ防止啓発のために、数年前に興味深い実験を行っています。『植物をいじめると成長に影響はあるのか』というテーマでした。実験では、水や肥料、日光の量など条件を同じにして2つの同じ種類の観葉植物を設置します。そして、一方には「優しく愛のある言葉」を、もう片方には「悪口などのネガティブな言葉」を、レコーダーに録音して30日間連続で流し続けたそうです。

その差は、上の写真（引用：IKEA UAE / 左が「いじめられた」植物）にみられるように歴然です。悪口やいじめの言葉には、その意味を超えたマイナスのパワーが圧縮されて詰まっているようです。科学的な根拠があるわけではありませんが、優しさや思いやりについて考えを正すきっかけになる結果のように思うのです。

いじめは、どこの学校・どの学級でも起こり得ます。だからこそ、未然に防止するために日ごろからの取り組みを大切にします。代表委員会や縦割りグループなどで行っている「朝の挨拶運動」も然り、「すてきな自分週間（人権週間）」も然り。また、早期発見・早期解決のために、児童の様子をつぶさに観察したり、気軽に相談できる雰囲気を作ったりすることにも努めています。

バリアフリー改修修繕が12月中旬から始まります

子供たちのために、地域の方のために、校舎1階部分におけるバリアフリー工事が行われます。学習に支障をきたしたり多くの制限が加わったりすることは特にありません。来校される保護者や学校施設を使用する社会体育団体にもご協力いただくこととなります。よろしくお願いいたします。

- 1 期間 12月15日頃～2月6日頃（改修箇所によって工期は異なります）
- 2 場所 ①体育館校庭側入口周辺 ②来客用玄関 ③第1校舎2・3年昇降口
④第1校舎4年昇降口 ⑤第1校舎階段手摺
- 3 その他 *年末年始を除く冬休み中も工事が予定されています。
*体育館正面入口脇に、工事車両4台分の駐車スペースを確保します。
*体育館側サッカーゴール裏近くに、工事車両が入る期間があります。



学校は小さな共生社会という考え方

「えっ、そうだったの?」「全然気づかなかった」ということがあるものです。でも、もしかすると知ろうとしていなかっただけ、自分と異なるものを意図的に見ないようにしていただけ、といった潜在意識がなかったと言い切れるでしょうか。困り感については理解しづらかったり目に見えなかったりします。だからこそ、「知る」ことから始める必要があるのだと思います。以下にいくつかの例を紹介して考えていくことにします。

1 化学物質過敏症

多くの人にとって便利な日用品や気持ちのよい香りなどが、ある人にとっては困り感の原因になっている場合があります。例えば、芳香剤や消臭剤、殺虫剤や虫よけスプレー、接着剤などの匂いや成分が原因となって、目鼻喉を刺激したり痒みや頭痛、めまい、吐き気などもよおしたりします。

2 聴覚過敏症

聴覚が過敏だと、小さな音まで聴こえやすかったり特定の音に対する辛さを感じたりします。「教室の中がうるさい」「大きな音が苦手」「たくさんの音(衣擦れ・窓の外音・空調機の音など)が聞こえて疲れる」と感じます。イヤーマフや耳栓をうまく活用することも考えられますし、座椅子の足にカバーをつける、運動会のピストルを旗にするなど対応策も様々です。



3 視覚過敏症

「ノートやタブレットが眩しい」「窓際や照明の当たる席の光が眩しい」「蛍光灯のちらつきが気になる」「視覚的情報が多すぎて気が散る」といった症状を示します。色付きの紙を使用したり、タブレットの明るさの調節をしたり、机の配置を工夫したりすることで解決できることがあります。教室環境のユニバーサルデザインもこうした児童生徒への配慮といえます。

4 HSC(HSP)

ハイリー・センシティブ・チャイルド(パーソン)の略です。最近では「繊細さん」といった呼び方で本も出版されています。「相手の気持ちやその場の空気を読みすぎて気疲れしてしまう人」というとわかりやすいかもしれません。共感値が高く優しい人が多いようです。

私の昔話になりますが、話をしっかり聞かせたいが故に担任する児童に向け、「いいですか、一度しか言わないからよく聞いてください」と、聞く力を育てるつもりで呼びかけたことが何度もあります。でもこれは、インクルーシブ教育の定義にある「人間の多様性の尊重」を否定する指導だったと今頃気づきます。つまり、「口頭による指示を一度で完全に理解できる」という児童しか学習に参加できないことになります。当然、学習する機会を失う児童が出ることになります。反省しかありません。これを一例として、学びやすい環境づくりという点では、学校にはまだまだ課題がたくさんありそうです。

インクルーシブ教育とは、障害のある子どもと障害のない子どもに別々の教育を行うのではなく、全員が共に学べるような形で教育を行うことを意味しています。このためにまず、「教室にも世の中にも、自分には理解しきれない相手がいる」という現実を認識するとともに、そういう人とどうやって折り合いをつけ共存していくのかを考えることから始めたいものです。これこそ「共生社会づくり」の入口です。“みんなで一緒に”より“互いに尊重(リスペクト)”という姿勢が大事だと考えます。すべてを理解できるわけではないけれど、「認めている」「無視しない」という関係が前提です。

いろいろな姿を見せる子供や教職員が生活する学校も、一つの小さな共生社会になるように工夫・努力を続けていきます。

